試合時間残り 34 秒、主導権は間違いなく関学の手の内にあった。それでもなお、勝利の女神は答えを出してくれなかった。

【第１クオーター】

オービックのレシーブで試合開始。タッチバックで 25 ヤード地点からの攻撃となり、ＱＢ菅原からＷＲ清水、萩山へのパスで敵陣まで進んだ。そして、最後は６分 19 秒にＲＢ古谷がエンドゾーンに飛び込んで、先制ＴＤを決めた。しかし、このドライブで 13 プレーを費やした。関学大主将ＤＥ梶原が「我慢していたら必ずチャンスが来るからと、大寺守備コーディネーターに指示されていた」通りの展開。しかもこのドライブ中にオービックＱＢ菅原が関学大ディフェンス陣の厳しいタックルに遭って、一時ベンチに下がった。昨年とは違い、一発ロングゲインを許さない奥深くを守る慎重な関学守備が見えない重圧をかけ始めていた。

対する関学大はＱＢ畑のパスが思うように決まらず、攻撃権は再びオービックへ。すると菅原からＷＲ木下、古谷へのパスで着実に前進した。さらに池井へのパスでファーストダウンを獲得。木下へ 24 ヤードのパスも決まり、敵陣 26 ヤード地点まで進んだ。そして木下へのパスでゴールまで９ヤードとしたが、右ラテラルパスが乱れ、木下がファンブルしたのを関学大ＤＢ保宗がリカバー。攻撃権を奪い返した。このドライブ 10 プレー目に起きた、「目論見通り」のターンオーバーだった。

【第２クオーター】

関学はＲＢ望月のランなどで前進を図るも、ファーストダウンが取れない。オービックも菅原を一時ベンチに控えさせ、ＱＢ龍村が登場。池井へのパスなどで攻撃するが、思ったほど前進できない。互いにに決め手を欠き、試合は小康状態となった。

ここで関学大はワイルドキャット攻撃を繰り出した。ＲＢ野々垣がＱＢに位置に入り、自ら走ってファーストダウンを獲得した。しかし、続く畑からＴＥ金本へのパスでは、攻撃権は更新できなかった。とはいえ、このパスはこの日は初のスローバックで、それまで左右に展開したランプレー主体だったところから、徐々にそれを逆手に取る段階へと入っていく。

オービック攻撃にも手詰まり感が漂い始める。「スピードがあって攻めにくかった」という関学ＬＢ池田を攻めたパスは、その池田にインターセプトされる結果に。その後オービック主将のＬＢ古庄が畑のパスをインターセプトし、守備が持ちこたえるが狙った通りの展開という意味では、流れは関学へと傾き始めていた。

ディープにＳＦ３人を投入してオービックにロングパスの選択肢を選ばせないようにしていたのだ。

そして、前半残り１分を切ったところで、関学はこの試合に向けて準備してきた「牙」をむき出しにする。敵陣 25 ヤードで４ｔｈＤＯＷＮ。ＦＧ体型を準備するように選手交代を見せながら、サイドラインに戻る振りをしたＷＲ南本が右端に一人だけレシーバーとしてセットしていた。オービック守備陣の誰もが気付かないままプレーが始まると、スナップを受けたホールダーの桜間がおもむろに立ち上がり、右奥へロングパス。そこへＷＲ南本が走り込み、ゴール前３ヤードに迫る。そして、前半残り 19 秒でまたもワイルドキャット体型でＱＢの位置に入ったＲＢ鷺野が望月への３ヤードＴＤパスが決まり、同点に追いついた。スコアはタイに、流れは完全に関学がつかんでいた。

【第３クオーター】

個人技で勝ってはいるものの、関学守備のロングパスを警戒した守備網に得点できないオービック。逆にオービック攻撃のミスを誘発するような粘りの関学。戦前の予想を裏切る展開は後半いきなり波乱を見せる。

後半は関学大ＷＲ木戸のリターンで試合再開。直後の畑のパスをオービックＤＢ滝沢がインターセプトし、攻撃権を取り戻した。そして、敵陣 20 ヤードまで進むと、菅原から左コーナーに走りこんだ木下へＴＤパスが決まり、後半開始２分２秒に再びリードを奪った。

対する関学は、再びワイルドキャットを使用。しかもＲＢ４人を入れて、ブロックもレシーブもキープもできる状態にするという、オービック守備としては一瞬プレーリードに困るように仕向けたものだ。関学ＯＬ陣の劣勢をバックスの動きでカバーしようとする工夫だった。その上ノーハドルでオービックから対応の時間を奪った。オービック大橋ヘッドコーチをして「いろいろ準備をしてくるのは予想していたが、あそこまでとは想像できなかった」と言わしめた。このドライブは続かなかったものの、この後は双方ともにＦＧを失敗し無得点のままで終わった。

【第４クオーター】

１ＴＤ差で迎えた最終Ｑ。オービックは菅原から清水へのパスで 30 ヤード地点まで進む。そして、菅原が自ら走ってファーストダウンを獲得。池井へのパスでゴール前 12 ヤード、菅原のキープで４ヤード地点に迫る。ところが、ここで関学大ＤＢ吉原がファンブルリカバーし、ターンオーバー。勝利への執念を見せた。

このドライブ、関学は自陣 19 ヤード地点４ｔｈＤＯＷＮでパント体型を取りながら、Ｐ堀本からＷＲ小山へピッチ。そのまま小山が左オープンを走り切り攻撃権更新。このドライブでＴＤを奪うという執念を見せる。さらに畑からＷＲ梅本へのパスで敵陣深く攻め込み、そして、畑は自ら２度キープし、19 ヤード地点まで前進。しかし、その前

にオービックＤＬ紀平が立ちはだかり、４ｔｈ７と窮地に陥る。そこから畑が右へパスを投げるフェイクを２度見せながら、オービック守備を威嚇し、そのまま右オープンを走り、再度攻撃権更新。そして、望月が２ヤードのＴＤランを決め１点差に詰め寄った。ここで関学は迷わず２ポイントコンバージョンを選択した。畑から左ラテラルパスを受けた望月が、タックルを受ける寸前にＷＲ小山へチェストパスを放り投げ、倒れ込みながら小山が捕球した瞬間、15 対 14。ついに関学が逆転した。守備が自分に向かってこなければ望月自身がキープするはずだったこのプレーは「通常の練習が終わった後、小山と毎日タイミングを合わせていた」という、まさに今シーズンのライス制覇にかける努力が結実したプレーだった。

残り時間は３分。オービックは逆転をかけてドライブする。しかし、ここで菅原が関学ＤＢ3 人が集まっている奥のゾーンへ不用意に投げてしまい、関学ＤＢ鳥内がインターセプト。残りは１分 39 秒となり、関学 11 年ぶりの日本一は目前。試合会場の誰もがそう思ったはずだった。

攻撃時間を残したいオービックはタイムアウトを使い切って時計を止めにかかる。そして関学攻撃をパントに追い込むと、このパントは低いライナーで飛び、前に詰めたリターナー池井が難なくキャッチ。関学陣 49 ヤードで攻撃権を得る。
残り時間は 34 秒。オービック宮本攻撃コーディネーターは言った。「関学のパス守備が去年より引いて守っていたとはいえ、空いているところばかりを選んでいた試合だった。もっと果敢に勝負してよかったのでは」と。その勝負の機会がこの時だった。コンスタントにキャッチしていた木下を右コーナーへ走らせ 19 ヤードゲイン。続けて萩山にはカットインから右奥へ 29 ヤードのパスが決まった。「ＦＧでいいという気楽さはあった」（菅原）とはいうものの、ゴール前 1 ヤードへと迫り、最後は残り 10 秒で古谷がエンドゾーンに走り込んだ。

試合時間残り２秒でのラストプレーは関学大畑のエンドゾーンへのヘイルメリーパス。これが不成功となり、ファイナルスコア 21 対 15。オービックに勝利の女神は微笑んだ。「ＯＬ陣が頑張っていたから思い切り投げ込めました」と笑顔を見せた菅原が史上初めて３年連続ＭＶＰに選出された。

攻守蹴、すべてに渡って出来うる限りの準備をしてきた関学。その執念を要所で断ち切ったのはオービックの守備だった。２度のインターセプトでフィールドポジションを確保し攻撃陣の不調をフォローした。

コーチとしてチームに残る関学主将・梶原は言った。「負けて悔いは残っていますが、３年生たちを来年鍛えてまたここに出てきて、同じ相手を倒せたら気持ちも晴れるんじゃないでしょうか」。オービックによるライス史上２チーム目の３連覇は、日本フットボール界に新たなライバル対決を誕生させた。

（日刊スポーツ　井藤　融）